

日本史研究学域 入学前課題講評

今回の課題では、網野善彦『日本の歴史をよみなおす（全）』と都出比呂志『王陵の考古学』が、7対3の割合で選択されました。過去2年間は2対1でしたが、前者の選択者がより多い傾向へと戻ったようです。内容的にも、格差社会が進行する中、歴史上の差別問題に対する関心が深まっているようにも見えます。みなさんが2回生に進むとき、日本史学（文献史学）専攻と考古学・文化遺産専攻にわかれますが、入学前の興味関心が1年間でどう変わるのか、あるいは今の確信を深めることになるのか、これからの1年間が楽しみです。

さて、課題の要求は、上記のうちいずれか1冊を読み、著者の述べるところを要約したうえで、それに対する自分の考えを具体的な根拠をあげて述べてください（要約400字程度、自分の考え800字程度とします）、というものでした。多くのレポートで、「要約」と「自分の考え」に別個に見出しを付け、意識的に書き分けるなど、要求通りに執筆されていました。みなさんが真摯に課題に取り組んだ様子がうかがえます。なかには著者の主張それ自体を、根拠を挙げて批判する者もあり、驚かされました。ただ一方では、どのように書けばよいのか、とまどった人もいたようです。入学後にはレポート試験が多くありますので、ぜひ4月までに、レポートの書き方についての本を読むなどしておいてください。

たとえば、1つめの要求である「要約」とは、あくまで著者の主張が何か、を読み取るものです。教科書と違い、個々の歴史書に書かれている事柄は、先人の研究成果を踏まえつつも、その著者が学問的手続きに基づいて新たに述べたことであり、他のどの著者も、それと同じようには論じていないはずで、要約する際に、諸君が他の本で得た知識を混ぜて書いては、その著者の主張を要約したことにはなりませんし、また、その著者が前提としている通説的、概説的説明の部分を要約しても、その著者ならではのオリジナリティは出てきません。著者のオリジナルな主張を的確につかむこと、それこそが「要約」なのです。そしてこの、オリジナルな主張こそが、みなさんが大学で学ぶ「研究」へとつながっているのです。

したがって、2つ目の要求である「それに対する自分の考え」についても、あくまで「考え」であって、「感想」ではありません。また、ネット上で仕入れた情報は、当然ながら、皆さんならではの「考え」にはなりません。しかも、その「考え」とは、空想や単なる思いつきではなく、「具体的な根拠をあげて」述べるよう要求されています。「研究」とは、他者（読者）を説得できて、初めて意味あるものとなるからです。実際、4年後の皆さんが取り組む卒業論文でも、この「具体的な根拠」が求められ、このため、文献や遺物などの、いわゆる「史料」の取り扱いに習熟することが、大学の講義でも重要な位置を占めることになります。そして、そうした学びを経て完成された、みなさんの先輩たちの卒業論文の中には、そのオリジナルな主張が評価されて、学術雑誌に発表されたものも少なくありません。

今回とりあげた2冊は、いずれも日本を代表する歴史学者や考古学者が著したすぐれた書物です。非常に示唆に富んだ内容が含まれており、今は理解できないことでも、今後皆さんが日本史研究学域で学び、他の本をどんどん読んでいく中で、あらためてその含蓄の深さを感じるようになると思います。是非とも、大学に入って何年か後にこれらの本を読み直してください。おそらく成長したみなさんは、今回以上に理解でき、その時点での「自分の考え」を、闊達に語るができるようになっていくでしょう。